



Title	ブラジルの大学入試におけるクォータ制度の検討 : 学生の変容に着目して
Author(s)	山脇, 佳
Citation	未来共創. 2022, 9, p. 225-241
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88555
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ブラジルの大学入試における クォータ制度の検討

学生の変容に着目して

山脇佳

要旨

本研究の目的は、ブラジルの大学入試に関するクォータ制度がもたらした学生の変容について現地学生のインタビューを通して明らかにすることである。ブラジルにおいて、高等教育へのアクセスは人種や社会階層によって偏りがみられる。そのような格差を是正すべく、民主化運動を背景に、ブラジルでは大学入試におけるクォータ制度が導入された。先行研究では、制度導入後、制度利用者と非制度利用者の間で分断が存在するということが確認された。そこで、本研究は、二者間の実状を踏まえた上で、交流を契機とする学生の変容についてインタビュー調査によって明らかにした。

クォータ制度は教育機会の均等や格差是正を目的に導入されたが、導入後には非制度利用者側が入試制度に不公平と感じていることや制度利用者と非制度利用者の交流の機会がないことなど、ブラジル社会の格差問題が背景にあると考えられる課題が大学内において依然として存在していることが確認された。それは非制度利用者と制度利用者の間で分断の要因になっていた。また、格差是正を目的に設けられたクォータ制度導入後、一部の非制度利用者は制度や制度利用者に対して不公平と考えていたが、交流を通して分断から共生へと意見を変えた非制度利用者の存在が明らかになった。また、交流を通して社会に存在する構造的な差別に目を向けることで、大学内の分断が解消される可能性を見出した。

目次

1. 問題の設定
 - 1.1. 問題の背景
 - 1.2. ブラジルの大学入試におけるクォータ制度
2. 研究・調査方法
 - 2.1. 研究方法
 - 2.2. インタビュー調査の概要
 - 2.3. 分析枠組み
3. 分析結果・考察
 - 3.1. グループ形成－教室空間における差別の顕在化
 - 3.2. 交流を通じたクォータ制度に対する意識の変容
 - 3.3. 差別を個人ではなく構造の問題として捉えるまなざし
4. まとめと結論

キーワード

アフーマティヴ・アクション
ブラジル
教育機会
人種
社会階層

1. 問題の設定

1.1. 問題の背景

本研究の目的は、ブラジルの大学入試に関するクォータ制度がもたらした学生の意識の変容過程について、現地学生へのインタビューを通じて明らかにすることである。ここでいうクォータ制度とは、差別撤廃を目的として、大学、議会、官公庁や企業などにおいて、被差別集団の人々に対して予め一定数の割当を設ける措置をさす。

ブラジルにおいては、過去に奴隷制度が存在しており、当時の人々は白人か非白人の二つに分けられ、それは抑圧者と被抑圧者の関係性と同等であった。両者の不当な関係は、現在の格差に大きく影響している。ブラジルでは経済的な格差が教育格差に強く結びついており、そのような社会構造は教育のアクセスや経済的な再分配に関する不平等を維持し続けている (Marteleto 2012)。

各年齢期別の総就学率について、ブラジル地理統計院(O Instituto Brasileiro de Geografiabe Estatistica 以下、IBGE)(2018)のデータによると、小学校、中学校、高校への進学は性別を問わず8割から9割の人々が達成していることがわかる。一方で18歳から24歳の就学率は約3割である。その約3割の人種別就学率を見ると、黒人・褐色と比較し白人は約2倍の数が就学している (IBGE 2019)。このように、ブラジルにおいて白人と黒人・褐色の二者間の進学率は、年齢の上昇に合わせて差が大きくなっていることがわかる。

ブラジルの高等教育に関しては、私立大学よりも公立大学の方が高水準な教育を受けることができると一般的に考えられている。そのため、教育水準の高い公立大学の入学者の多くは私立学校を出た富裕層で占められ、低所得者層は高い学費を負担し私立大学に集まる傾向がある (江原・山口 2012)。つまり、ブラジルにおいては所得によって公立・私立学校のどちらに通うことになるのが明確に分かれており、公立大学は私立学校出身の生徒で占められている。

ブラジル教育省の管轄であるアニシオティシェイラ教育研究調査機関 (O Instituto Nacional de Estudos e Pesquisas Educacionais Anísio Teixeira 以下、INEP)

は、毎年、基礎教育評価システム（Sistema de avaliação da Educação Básica 以下、SAEB）と呼ばれる、「ポルトガル語」「数学」「化学」「自然科学」の4科目の学力テストを行っている。対象は全公立学校と調査を希望した私立学校である。その学校種別の得点率をSAEB（2019）のデータをもとに図1に示した¹。

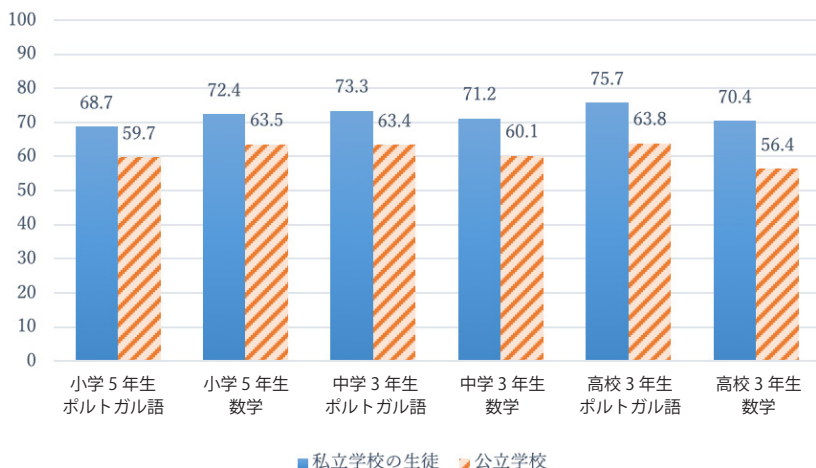


図1 私立学校・公立学校の生徒の得点率 (%)
SAEB（2019）のデータをもとに筆者が作成

図1では、私立学校の生徒の得点率が公立学校の生徒の得点率をすべて上回っていることがわかる。特筆すべきは、私立学校の生徒と公立学校の生徒間において、ポルトガル語と数学のどちらにおいても、小学5年生よりも高校3年生の得点率の差が開いていることである。すなわち、私立学校と公立学校の生徒間の学力差が大学の入試を迎える時期にさらに拡大しているのである。また、1995年から2005年にかけて数学とポルトガル語の成績について、公立高校が私立高校を上回っていることは一度もない（Demo 2007）。学力に基づいて行われる高等教育の選抜では、私立学校に通うことのできる白人をはじめとする富裕層の学生によって、進学者が占められてしまう。このような問題を背景に、ブラジルでは2000年代から大学入試におけるアフーマティブ・アクション（積極的差別是正措置）の一環としてクォータ制度が導

入されたのである。

1.2. ブラジルの大学入試におけるクォータ制度

ブラジル政府は軍事政権を乗り越え、1980年代以降、当時のフェルナンド・エンリケ・カルドゾ大統領の所属していたブラジル社会民主党（PSDB）が「社会正義」を掲げ、すべての人が平等に教育を受けることのできる社会をつくるべく、クォータ制度（Sistema de Cotas）の実現を目指した。その後、2001年の大統領選挙にて当選したブラジル労働者党（PT）のルーラ・ダ・シルヴァ大統領が、その思想を踏襲し「人種クォータ制度（Cotas Raciais）」を試験的に一部公立大学に導入した。すべての公立大学に導入の義務はなかったが、その制度は首都ブラジリアや全国の国公立大学に徐々に広まっていった。

例えば、ブラジリア大学（Universidade de Brasília）において、開始当初の人種クォータ制度では、人種的に被差別集団である黒人、褐色・混血、先住民にルーツをもつ学生を対象に20%の優先枠が設けられていた。しかしその制度は、地域によって人種の比率が異なることや、経済的な格差に起因する教育機会の不平等を是正するために、人種よりも社会経済的な観点を重視したものへと移行した。2012年の教育基本法改正に伴い、翌年からクォータ法（Lei de Cotas）が施行され、公立学校出身の学生・貧困家庭の学生を対象に特別合格枠を割り当てる「社会福祉クォータ制度（Cotas Sociais）」が全国の連邦大学に義務付けられた。2012年までは人種を主に考慮していたクォータ制度であったが、それ以降は、人種のみならず、社会経済的に不利な立場に置かれている人に主眼を置いた制度へと移行変わった。しかし実情として、社会福祉クォータ制度によって保障される学生の多くは非白人たちなのである。

法律で定められたクォータ制度はブラジルの連邦大学の入試において、公立高校出身者に一定の優先枠を設ける制度である。この対象者たちは入学試験の合格点が予め低く設定されることで、一般受験をする者より入学しやすくなっている。本制度はブラジルにおけるすべての連邦大学に導入されているが、大学によって合格枠の割合は学部ごとの定員数や志願者数などにより異なっている（図2）。

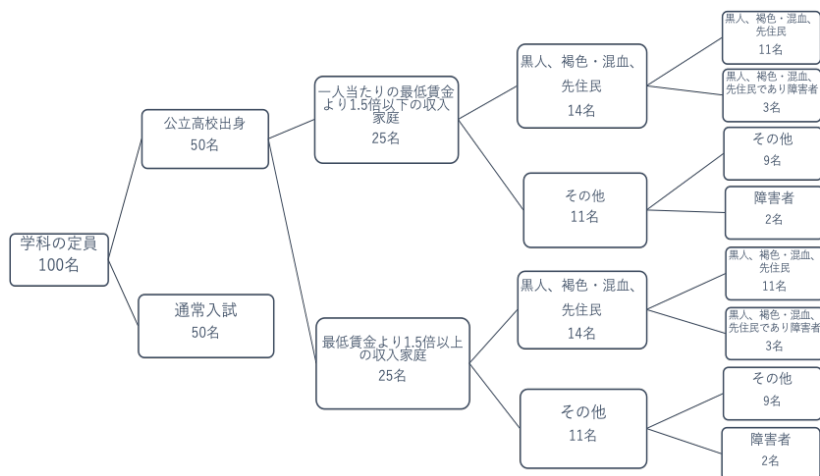


図2 「定員が100人と仮定した場合の特別枠の推定」ブラジル
政府教育省(2012)を参考に筆者作成

クォータ制度に関する先行研究では、制度利用者（以下、コチスタ）と非制度利用者（以下、非コチスタ）の關係に焦点を当てた研究としては、Limaほか(2014)が挙げられる。Limaほか(2014)は、セルジペ大学(Universidade de Sergipe)において、クォータ制度の導入前後で非コチスタが抱く制度に対する否定的な意見は変容することがなく、むしろ制度に対して否定的な非コチスタが一部で増えていることなどを明らかにした。制度への支持が広がらない理由は、大学内でコチスタと非コチスタが交わっていないからであり、その状況を引き起こしているのは、コチスタと非コチスタが互いに抱く偏見であるという。Limaほか(2014)によると、非コチスタはコチスタを、学力が低いにもかかわらず制度を利用して不当に入学しているものと認識しており、コチスタは、非コチスタがそのような差別意識を抱いている存在であると認識している。つまり、Limaほか(2014)は双方の心理状況を偏見という言葉で表現し、交わらない原因に位置付けているのである。

しかしながら、Limaほか(2014)の考察には限界がある。佐藤(2005)が指摘するように差別の原因を偏見に還元する議論では、二者間の権力関係が覆い隠されてしまう。すなわちコチスタと非コチスタが交わらない原因を両者

がともに抱く偏見にあるという理解では、コチスタが大学内で不当な地位に置かれ続ける支配関係を構造的に捉えることができない。そこで本研究では、2013年のクォータ制度導入以降、コチスタと非コチスタが敬遠し合うような状況について、その原因を偏見に還元するのではなく、ブラジル社会に存在する差別構造にあるという視点から捉えるために、「分断」と表現して分析を行う。

2. 研究・調査方法

2.1. 研究方法

本研究では、ブラジリア大学で2020年に行ったインタビューデータを用いる。クォータ制度に関しては、ブラジルにおいて論争的になっており、大学内においても意見の対立や制度のあり方をめぐって議論がされている状況である (Schwartzman & Silva 2012)。

本研究の調査地域であるブラジリアは人種による居住地域の分離が確認されている。富裕層が多く住む地域では白人を自認する人が80%以上を占めており、貧困地域では黒人や混血が多くなる。また貧困ライン以下の暮らしをしている人々の7割が黒人・混血である (奥田 2021: 135)。地域的な居住分離は社会経済的だけでなく教育のアクセスなどの格差や不平等と結びついており (テルズ 2011)、加えて、ブラジリア地域で唯一法律で定められたクォータ制度を設けているのは連邦大学であるブラジリア大学だけであることから、本研究の目的を明らかにするためにブラジリア大学を調査対象として選定した。

2.3. インタビュー調査の概要

本研究ではブラジリア大学のコチスタと非コチスタを対象とした半構造化インタビュー (滞在期間: 2020年3月5日～3月16日) を実施した。筆者は2017年2月から同年7月にかけてブラジリア大学に交換留学をした経験があり、インタビュー調査を行うにあたっては、インタビュー時のポルトガル語の通訳、現地の案内、クォータ制度をはじめとするブラジル社会の現状に関

する情報提供などはインタビューである知人（ブラジリア大学の学生）に協力を得た。インタビューは概ね一人当たり一時間行った。調査では、クォータ制度についての賛否やクォータ制度導入後の大学の状況、特に学校生活を送る学生の様子などについて尋ねた。

大学内外で活発に議論されているクォータ制度について、個人的な経験やそれに基づく制度に対する意見などを尋ねる必要があるため、率直に話をすることが可能な知人に調査協力を直接依頼し、また知人を通してスノーボールサンプリングにより知人以外の対象者を募った。調査対象はブラジリア大学に通う正規学生10名である。対象者の属性を表1に示した。

表1 インタビュー協力者リスト

	人種	年齢	性別	学部	在籍学期	インタビュー日時
A（非コチスタ）	日系	24	男性	工学部	第9学期	2020/03/07
B（非コチスタ）	白人	23	男性	文学部	第5学期	2020/03/08
C（非コチスタ）	日系	23	女性	文学部	第11学期	2020/03/10
D（非コチスタ）	白人	21	女性	文学部	第8学期	2020/03/10
E（コチスタ）	混血	22	男性	文学部	第6学期	2020/03/10
F（コチスタ）	混血	21	男性	経営学部	第7学期	2020/03/10
G（コチスタ）	黒人	21	女性	文学部	第9学期	2020/03/11
H（非コチスタ）	日系	25	男性	生物学部	第6学期	2020/03/12
I（非コチスタ）	日系	26	女性	工学部	第9学期	2020/03/12
J（非コチスタ）	黒人	27	女性	建築学部	第10学期	2020/03/13

2.4. 分析枠組み

本研究では、分析枠組みとして佐藤（2005）の「関係モデル」とオールポート（1954= 1961）の「接触仮説（contact theory）」を援用する。佐藤（2005）は差別に関して、マジョリティ／マイノリティ集団といった二つの集団の対立や権力関係として捉える考え方を「関係モデル」と呼んでいる²。「関係モデル」の関係とはもともと異なる社会的カテゴリー間の関係ではなく、障害者や人種などあらゆる人々が同じ社会に存在している中で「よそ者」が生み出される関係

を作り出すことである。言い換えると、差別とは、「本来『内部』である人々を『外部』へと追いやる行為」(佐藤 2005: 29)なのである。「関係モデル」では対立する集団や個人が対等ではなく非対称性を有していることを前提としている。つまり、二者の権力関係に非対称性がありながら「内部」から「外部」へと追いやる・追いやられる構造、「排除」が差別である。

本研究は大学内の差別を構造的に捉えるために、「関係モデル」を援用し、そのような差別構造に抵抗する主体を形成する契機については、オールポート (1954= 1961) の「接触仮説」を用いて分析する。「接触仮説」とは、異なる集団と接触することで否定的なステレオタイプが改善され偏見が低減することである。オールポート (1954= 1961) は「接触仮説」について、単なる接触だけで外部集団との関係が良好になるのではなく、条件を満たした場合のみ効果が得られると述べている。それらの条件については、その後の研究の蓄積の中で、追加や訂正が行われてきており、論者によって示す条件は異なっている。本研究ではブラウン (1995= 1999) が提示する接触の条件に依拠する。ブラウン (1995= 1999: 244-254) によると、その条件とは、「社会的および制度的支持」、「知悉可能性」、「対等な地位」、「協同」であるという。

まず、「社会的および制度的支持」とは、本研究でいうクォータ制度のような接触の促進を生み出す諸制度に対して、社会的もしくは制度的に支持する枠組みが不可欠ということである。第二に「知悉可能性」とは、接触が該当する集団間に関係を構築するために十分な頻度や期間、密度の濃さを有していることである。ここでは、単に長い期間異なる集団同士が近くに存在していればよいというわけではなく、異なる集団に関する知識を有しているかどうかは態度変容の原因と考えられる。第三に「対等な地位」とは、接触ができる限り対等な地位の上、当事者間で行われる必要があるということである。例えば、「教室での同級生」などが挙げられる(ブラウン 1995= 1999: 249)。最後に、「協同」が必要な条件である理由としては、異なる集団がそれぞれ共通の目標を達成するために依存しあっている限りは、互いに友好的な関係に発展するからである。ブラウン (1995= 1999) によると、ここで留意すべき点としては「共同で課題を遂行することで達成できる具体的で小規模な」(ブラウン 1995= 1999: 251) 目標であるという。

本研究ではコチスタと非コチスタの間にある分断に関しては「関係モデル」、学生の意識変容の過程については「接触仮説」を用いて分析する。ただし、後者についてはオールポートやブラウンらが述べる接触の条件を鑑みて、単に物理的な接触以上の意味をもつもの、すなわち分断を超えた関係性をつくる経験として「交流」という言葉を用いる。

3. 分析結果・考察

3.1. グループ形成－教室空間における差別の顕在化

本節ではLimaほか（2014）が述べるように、クォータ制度によって学生間で分断が生じているのか、コチスタと非コチスタによるグループ形成について論じる。

筆者：大学内で困難はありましたか？

F：私のクラスでは私立学校出身の学生の成績や行動を見て、公立学校出身の学生同士で、グループを作ったこと。初めの数日で公立学校出身の学生がお互いの存在を認識し、自分たちのグループを作ってしまった。非コチスタのグループとコチスタのグループ、この二つのグループが存在していた。例えば経済的な質問〔教員による〕をされたとき、非コチスタの学生は何も恥ずかしくなさそうに恐れず回答していた。一方、コチスタは、非コチスタのグループと比べ経済的な余裕もなく、答えるのに恥ずかしい気持ちを抱えていた。（F/コチスタ/男性〔 〕内は筆者補入）

あえて焦点を絞らず、Fにとっての大学における困難を尋ねた結果、グループ間の分断に関して語られた点に注目したい。つまり、Fにとって非コチスタとコチスタの分断が常に念頭にあったのだろう。コチスタであるFは、入学当初に非コチスタと壁を作ったことをきっかけにコチスタたちでグループ形成したことを困難と捉えていた。続いてコチスタと非コチスタの分断に関するJの語りを参照する。

J: 私の学部は非常にエリートが多くて、裕福な人、やや年配の人、かなり大きな資本を持つ人たちがいた。建築学は一般的に富裕層がいる学部。クォータ制度によってブラジリア大学にあらゆる社会階層の人々を含めたこれまでこの大学にいなかった黒人・褐色人・先住民・キロンボ・低所得者層の人々を入学させることが決定された。だけど、これらの人々はまだ完全に一体化していない。少なくとも私の学部では関わるのが頻繁に起きない。

筆者: それについてどう思う?

J: ひどいことだと思う。異なる状況にいる他人と経験することが重要だと思うから。だけど、そう思わない人もいる、それは学部でも最も裕福な人たち。富裕層と貧困層のグループ形成はよくあることで、たくさんの場所で生まれている。(J/非コチスタ/女性)

Jの語りから、建築学部 に在籍する非コチスタはあくまで自集団を変容することなく、コチスタを否定的に捉えていた。それは佐藤(2005)の「関係モデル」にあてはめて考えると、非コチスタはかれらにとって自集団とは異なる存在としてコチスタを認識し位置付けることで、「よそ者」扱いをしていたといえるのではないだろうか。それにより、同じ学部 に在籍していながらもコチスタと非コチスタの間で排他的関係が解消されないまま、差別が存在していると捉えることができる。

FとJの語りから、グループ間の分断はブラジルにおける根深い社会的・経済的な格差や不平等が教室空間で顕在化したものではないだろうか。大学外においてもブラジルでは教育や社会経済的な不平等が存在しており、その結果、教員による収入に関する問いかけに恥ずかしさを持たずに「答えることのできる者」と恥ずかしさが拭えず「答えるのに躊躇してしまう者」が明確に分かれたといえよう。つまり経済的な格差が、非コチスタとコチスタの教室内部における分断に大きく関わっているのである。

以上を踏まえると、大学内の分断はLimaほか(2014)が指摘した偏見によるものではなく、ブラジル社会に存在する人種や社会階層による不平等が、顕在化したものと捉えることができるだろう。

3.2. 交流を通じたクォータ制度に対する意識の変容

次に、コチスタとの交流を通じてクォータ制度やコチスタに対する意見が変わった非コチスタについて考察を行う。まずは、制度に否定的な考えをもつAの語りを見てみよう。

A: お金払って頑張る人もいるじゃない？ 僕が思うに、友達で落ちた人は、本当に勉強を頑張っていて、それでも落ちたからそういう「お金を費やして勉強に励んでいた友人のような」人が入ればいいんじゃないって思っちゃった。

筆者: なるほど……。3年前にコチスタが首席で医学部を卒業したって聞いたんだけど、どう思う？

A: それは特別で、ほとんどの人たちは全然だよ、それは珍しいからニュースになる。だから特別で注目が浴びたんだ。だってコチスタがみんないい成績で卒業してたら、その人が話題にならないでしょ。だから普段は成績が良くないってことだよ。(A/ 非コチスタ/ 男性 []内は著者補入)

Aは「コチスタの友人はいる」と述べており接触の経験は確認されるが、クォータ制度やコチスタに否定的な立場をとり続けている。それはAが、「成績が良くない」コチスタが入学できるクォータ制度を、「不公平」なものとして捉えているからである³。一方では、コチスタとの交流を通じて、クォータ制度について否定的な考えから肯定的な考えに変容した人もいる。Hのケースを見てみよう。

私もクォータ制度が法律で決められたときは、50%は多くない？ 多すぎない？ って思っていたんだけど、コチスタとして無償の塾に通っている子たちをみて、本当に頑張っているんだなって。かれらの生活や苦労を知って、賛成と思えたり50%は必要だなって思ったね。(H/ 非コチスタ/ 男性)

AとHは互いに、コチスタと接触や交流する機会を経ている。しかしAは偏見が拭えず、これまで大学に存在していなかったコチスタという新たな社会集団が大学に参入すること否定的な立場をとっていた。一方で、Hは分断や差別を超えてコチスタと共生しようとしている。このような違いが現れる要因を交流が効果を発揮するための条件から分析する。AとHの間で、「知悉可能性」と「協同」の条件について達成しているか検討する。まず「知悉可能性」について、Hはボランティア経験を通して、コチスタに関する社会的・経済的な問題に目を向けるようになったためコチスタの生活やかれら特有の困難の知識を有することができたのである。Aの場合は反対に、コチスタの成績を非コチスタの成績と比べ劣っているものとして考えており、「知悉可能性」は達成されていないように思える。

続いて「協同」に関して、Aからは「協同」経験は語られなかった。一方で、Hの「協同」とは、ボランティアとして教える立場でコチスタを目指す生徒たちに勉強を教えることで相互作用をもたらし、協働的な性質をもつ交流であることがわかる。

以上をまとめると、Aの場合は交流に必要な条件をすべて満たしていないため、コチスタに対して偏見が低減されることはなかった。一方のHは、条件を満たした交流を通じて、ブラジル社会に存在する不平等に目を向け、心境に変化が起こったのである。

3.3. 差別を個人ではなく構造の問題として捉えるまなざし

Hは、コチスタとの交流を通して、社会に潜む構造的な問題に目を向けてそこからクォータ制度やコチスタに肯定的な意見を持つようになったという。

私は黒人が大学に入ることには意義があると思っていて。私は今まで黒人の医者にかかったことがなくて、そして黒人の弁護士もいなくて黒人の議員もいない。白人だらけだったりする。私の私立学校の卒業アルバムを見ても、白人しかいない。(H/非コチスタ/男性)

このように、Hは大学教師や医者、弁護士、議員の中に黒人がいないという状況を改善するためにも、高等教育機関に黒人の学生がクォータ制度を利用して入学することに意義があると主張していた。人種的不平等が残存している現在のブラジル社会の構造について、Hはコチスタとの交流を通して批判的に捉えるようになったのである。

最後に、コチスタとの交流を必要と考えるJは、低所得者層に多く該当する非白人が抱える「歴史的な負債」を断ち切るためにもクォータ制度が必要であると述べていた。

ここブラジルでは奴隷にされた人々の子孫が存在していて、かれらには深刻な貧困状態が続いてきたという歴史的な負債がある。財産は代々受け継がれるものであり、階級や知識、特権を維持するために教育を受けるといふ社会構造が存在しているから、[黒人が] ある日突然お金持ちになることはない。(J/非コチスタ/女性[]内は筆者補入)

Jの語りからは、ブラジル社会では人種差別によって生まれた様々な格差は世代間で継承され、負の連鎖を止めることがいかに困難であることを示唆する。前述のとおり、Jが在籍している学部は建築学部であり、学部内のコチスタと非コチスタにおける分断をJは問題視している。

HとJの語りは、交流を契機に構造的な問題に目を向けることで分断が解消されていくことを示唆している。

4. まとめと結論

本研究の目的は、大学内でクォータ制度によって生じた分断の存在と、交流による学生の変容についてインタビューを通して明らかにすることであった。Fの場合、分断は偏見から生まれたものではなく、収入という明確な差異が表れやすい質問に対し、社会経済的に不利な立場に置かれやすいコチスタにとっては答え辛い状況を機に発生したのである。また、Jが在籍している建築学部では、交流が見られず、排他的な関係性が根強く浸透しているので

ある。

Limaほか(2014)の研究では分断の原因が偏見にあると捉えられていた。それに対し、本研究では分断を「関係モデル」という視点から捉えたことにより、分断は偏見により起こっているのではなく、ブラジル社会に存在する様々な不平等や差別によって生じていることが示唆された。

また、クォータ制度に対する意見の変容過程について、AとHを比較することで検討した。Aの場合、コチスタとの接触があったにもかかわらず、クォータ制度に対する意見は変容しておらず、むしろ逆差別として捉えていた。一方で、Hの語りからは、ブラウン(1995=1999)が提示する「接触仮説」の条件を満たしたコチスタとの交流を通じて、分断を乗り越えてきたことが読み取れた。それは、ブラジル社会に潜む差別構造を問題と捉え、コチスタをエンパワーする立場へと移行することに繋がっていた。

注

- 1 小学5年生が受けるテストの満点はそれぞれ、ポルトガル語350点、数学350点、中学3年生が受けるテストの満点はポルトガル語400点、数学425点である。高校3年生が受けるテストの満点はポルトガル語425点、数学475点である。なお、得点率の計算方法は、素点÷満点=得点率としている。小数点第2位以下は省略している。
- 2 佐藤(2005)は差別を「差異モデル」と「関係モデル」という二つの見方で提示している。前者は差別する側と差別される側の非対称性に着目していないことが佐藤(2005)自身も問題としている。本稿では差別の非対称性に焦点を当てているため、「関係モデル」を分析枠組みとした。
- 3 実力主義と競争の肯定からクォータ制度を否定する論理はこれまでの研究でも明らかにされてきた(Silva & Silva 2012)。しかし、ブラジリア大学を調査対象とした研究では、コチスタと非コチスタの間で学力に有意差は見られず(Augusto & Ribeiro 2015)、他大学でもコチスタの成績は下位に位置していない(Velloso 2009)。

参考文献

日本語文献

江原裕美・山口アンナ真美

2012 「ブラジルの教育事情—経済発展とともに注目すべき教育改革—」『ウェブマガジン 留学交流』15(6): 1-5。

奥田若菜

2021 『格差社会考 ブラジルの貧困問題から考える公正な社会』 神田外国語大学出版局。

オールポート、ゴードン

1961 『偏見の心理 上巻・下巻』 原谷達夫・野村昭訳、培風館。

佐藤裕

2005 『差別論－偏見理論批判－』 明石書店。

テルズ、エドワード

2011 『ブラジルの人種的不平等－多人種国家における偏見と差別の構造－』 伊藤秋仁・富野幹雄訳、明石書店。

ブラウン、ルパート

1999 『偏見の社会心理学』 橋口捷久・黒川正流訳、北大路書房。

外国語文献

Augusto, F. & Ribeiro, G.

2015 Uma avaliação do sistema de cotas raciais da universidade de Brasília. *Estudos em avaliação educacional*, 26(61): 146-65.

Demo, P

2007 Escola pública e escola particular: semelhanças de dois imbróglis educacionais. *Ensaio: Aval.pol.públ.Educ, Rio de Janeiro*, 15(55): 181-206.

Lima, M., Neves, P. & Silva, P.

2014 A implicação de cotas na universidade: paternalismo e ameaça à posição dos grupos dominantes. *Revista Brasileira de Educação*, 19(56): 141-254.

Marteletto, L.

2012 Educational inequality by Race in Brazil, "1982-2007: Structural Changes and Shifts in Racial Classification", University of Texas at Austin, 49(1): 337-358.

Schwartzman, L. & Silva, G.

2012 Unexpected Narratives from Multicultural Policies: Translations of Affirmative Action in Brazil. *Latin American and Caribbean Ethnic Studies*, 7(1): 31-48.

Silva, P.

2008 Normas Sociais e Preconceito: o impacto da meritocracia e da igualdade no preconceito implícito e explícito contra os cotistas. *Psicologia: Reflexão e Crítica*, 19(2): 309-319.

Silva, P. & Silva, P.

2012 Representações sociais de estudantes universitários sobre cotas na universidade. *Revista Psicológica*, 24(3): 525-542.

Velloso, J.

- 2009 Cotistas e não-cotistas: rendimento de alunos da universidade de Brasília. *Cadernos de Pesquisa*, 39(137): 621-644.

Web サイト

ブラジル教育省

- 2012 Ensino Superior Entrada as cotas para quem estudou todo o ensino médio em escolas públicas.
<http://portal.mec.gov.br/cotas/sobre-sistema.html> (2022/02/01 アクセス)

IBGE

- 2018 Estudos e Pesquisas • Informação demográfica e Socioeconômica n.38
https://biblioteca.ibge.gov.br/visualizacao/livros/liv101551_informativo.pdf
(2022/02/01 アクセス)
- 2019 Estudos e Pesquisas • Informação demográfica e Socioeconômica n.41
https://biblioteca.ibge.gov.br/visualizacao/livros/liv101681_informativo.pdf (2022/2/01
アクセス)

SAEB

- 2019 Resultados (Excel データ)
<https://www.gov.br/inep/pt-br/areas-de-atuacao/avaliacao-e-exames-educacionais/saeb/resultados> (2022/02/01 アクセス)

A study of university entrance exam of the quota system in Brazil ; Focusing on the transformation of students through contact

Kei YAMAWAKI

Abstract

The objective of this study is to clarify the transformation of students brought about by the quota system for university entrance examination in Brazil through interviews with local students. In Brazil, access to higher education is unequally distributed by race and social class. To correct such disparities and inequalities, a quota system for university entrance exam was introduced in Brazil in the context of the democratization movement. Prior research has confirmed that after the introduction of the system, the two parties do not intersect due to the influence of prejudice between users of the system and non-users of the system. Therefore, based on the actual situation between the two sides, this study clarified the transformation of the students triggered by the contact through an interview survey.

The quota system was introduced for the purpose of equalizing educational opportunities and correcting disparities. However, after its introduction, I confirmed that there were still issues within the university that were considered to be caused by disparities in Brazilian society, such as the fact that the non-system users felt that the entrance examination system was unfair and that there were no opportunities for exchange. It had become a factor of division between non-system users and institutional users. In addition, after the introduction of the quota system, which was established to correct the disparity, some non-system users thought that the system and system users were unfair, but it became clear that there were non-system users who changed their opinions from division to symbiosis through interaction. In addition, by focusing on the structural discrimination that exists in society through contact, I found the possibility that the division within the university could be resolved. In this study, we discussed these structures of discrimination and exchanges within the university.

Keywords : Affirmative Action, Brazil, educational opportunities, race, social class